平成２４年２月２５日(土)
東京コンファレンスセンター・品川

愛される学校づくりフォーラム 2012　in 東京

中　川　行　弘

１　午前の部パネルディスカッション「学校のお荷物（学校ＨＰ＆学校評価）を切り札に」
コーディネーター：玉置　崇
パネラー：大西貞憲　豊福晋平　三原 徹　小西祥二　平林哲也　水谷年孝
野木森広　柳瀬貴夫　鷲尾健仁　近藤肖匠

○　玉置先生より
・　自分がものをいい出すと迷惑がかかるのが愛知では定説　→　独りではできない
「一緒に学ぶ会を開きたい」「東京に行きたいなあ」・・・開催することができた　感謝！
・　ほとんど筋書きがない　準備不足もいけないのでパネラーは資料を準備している
・　皆様のご期待は午前より午後　ランチが出る　午後からでは失礼・・・朝から参加
・　開発した「学校評価アシスト」の解説　午前の期待度　１００％　６３．５％
期待していない人はまず午前から来ていない

○　自己紹介「お荷物と考えている学校は？」
・　近藤先生　玉置先生にあこがれた？・・・打ち合わせ不足↓（笑）
何年も更新されていない学校
・　鷲尾先生　亀田東小ホームページがすごい　管理職からやらされて本当はいやだった
「だから学校は視野が狭い」と保護者から言われている学校
・　三原先生　民間から校長に　五反野小学校から私立の学校へ
計画づくりに向け、保護者や地域との関係が必要ないと思っている学校
・　平林先生　毎日更新しているとっても評価の高い学校のひとつ　同じ~~臭い~~薫り
管理職にリーダーシップがない学校
・　水谷先生　言えないが特殊な学校の事情に詳しい　来年度からは・・・
プラス思考ができない学校
・　小西先生　教育長として毎日更新　すてきなホームページ　今日から新会長
教育委員会に来ない学校
・　野木森先生　全国学力学習状況調査が始まったときの愛知代表　本質の追究力
義務的にやっていて年度末集計に四苦八苦している学校
・　豊福先生　学問的見地から　文科省にもかかわっておられる　学問的支持風土
組織がどうなりたいか？共通意識と参画がどうなっているのか？わからない学校
・　柳瀬社長　保護者の立場　教育の本質を毎年の赤字を克服して支えておられる
ソフトがない　面倒　難しい
・　大西さん　日本中でだれよりも授業を何度もみていただいている（玉置先生より）
余計なことをするな！ということが出てくるような学校
・　中林先生　三重のすてきな校長先生　どのあたりがすてきかは・・・
会場からの評価を担当　「内々すぎる！」

○　学校広報の法的根拠は？
・　野木森先生からの学校評価や学校広報の法的根拠の説明
・　学校教育法施行規則に「学校評価は公表せよ」と掲載されている
・　学校ホームページに関係する法的な記述はない
・　「学校評価の公表を法律としてどうして示しているのか？」
常に学校は向上に努め、改善をしていく必要　ガイドラインを文科省は提示
・　学校評価ガイドラインにはホームページに関する記述はない

・　学校ホームページは、従来型の学校広報に付け加えて、学校や私たちが信頼を獲得し、保護者や地域全体で、学校づくり・授業づくりに参画していくもの

○　学校評価の本当の意味は？
・　学校評価をするということで「何をめざしているのか？」がわかること、それがみえることが大切。
学校評価をやらせられるのではなく、本当の意味を考えていく必要がある

○　学校評価を管理職の中でどう理解していくのか?
・　法令文はいらない。やらされるものではなく、積極的に自分から働きかける必要があるもの
・　評価というと「テスト」というイメージがある　学校の改善にどう生かしていくかが大切！
・　保護者の立場で考えると、「学校評価」という言葉自体を知らない保護者が多いと思う。
・　豊福先生から
「学校評価と学校広報は一対である」
正確に学校を知っていただき、改善に生かすために必要不可欠なもの
・　学校評価は法令文にあるからやらなくてはいけない。しかし、ホームページはやらなくてもいい
・　平林先生は３６５日学校ホームページを毎日更新されている。どんな気持ちで？
「いかに学校が知られていないのか？」学校の思いが伝わっていないことがわかったアンケートをする度に悲しい気持ちになっていた。学校を理解していただく一つの手段としてホームページを活用している。「アンケートに対して校長としてどう考えるのか？」のメッセージを「もどす」意味で発信している。こうすることで、学校の思いと保護者の願いとのズレは起きなくなるのではないのか？と思っている。毎日書くことで次第にじわじわ伝わっていく。子どもに「継続は力なり」といっている私たち。「自分がその模範をみせてくことが大切だ」との自分の強い信念や自分が大切にしている文化がそうさせている部分も

☆「学校のことを本当にわかっていない」→本の紹介　「この三部作を読めばわかる！」

○　現状でホームページを保護者はみているのか？ホームページの意義や価値は？
・　おおよそ半分ぐらいだろう。毎日みているのは２０％から３０％。こういう人たちが応援団になってくれていると思っている
・　全国学力学習状況調査の結果　更新具合
公立８６％が開設　義務教育が低いという結果
・　ホームページを活用していないということ　→　「リーダーシップがない」
・　全日本ホームページコンテスト　Ｊキッズ大賞　鷲尾先生が大賞
基本コンセプトとして、学校からご応募をいただかない
社会人ボランティアにより５００校を表彰
・　豊福先生がしかけ　発想は？２０００年前後は「ホームページ冬の時代」
「何のためにホームページをつくるのか？」だれもわかっていなかった
村井委員長　企画は豊福先生　応募する学校は「我こそは！」という学校
これでは子どもたちのことを考えて地味でベタにやっている学校を評価していけない
・　中学校を対象として実施していないのは？→スポンサーがないから

○　鷲尾先生の研究成果から
・　小１の保護者と小６の保護者との意識のちがいは？
情報開示の評価は小１の保護者が低い←よく思っていない
小１は全校対象の印刷物はよくみているが、学級学年に関する情報については高い
小６はどちらも低い・・・・・中学校はさらに低い・・・？（笑）

小１の保護者は子どもと学級にかかわる情報を必要としている←現状に不満
小６の保護者はほとんどみないが、ホームページはみる

○　亀田東小の特徴なのか？全国の傾向なのか？
・　私立の三原校長先生、私学はどうですか？
ホームページ　保護者はほぼ毎日みている　幼稚園の保護者も情報を求めている
一日の平均アクセスが１０００前後　十分みていただいている
印刷物は持ち帰らせても、なかなか伝わっていない

○　印刷広報とホームページで伝えることのちがいは？だれに伝えている？
・　印刷広報について　中林先生　学校だよりとホームページはほぼ毎日
ああいう分析はあまり好きじゃない　一人でもいればその人向けにしていけばいい
学校現場にはこのような分析はいらない
ホームページは、一見保護者向けであるが、実は先生向けでもある（こちらが大きい）
・　伝えたつもり　わかっているつもり　→　所詮「つもり」
子どもたちがたのしければ満足してくれる　子どもはそればかり話す→よく伝わる
・　ホームページと学校力を大西さんはどう考えるのか？
わかりやすく何が伝えたいのか？毎日更新だけでは・・・

○　何を受信したいのか？
・　平林先生「発信なければ受信なし」何を受信したいのか？
「親の本当の気持ち」を受信したい　学校の情報がわからないと保護者の思いや願いとずれる　それをうめるために発信をする　発信をする必ずと返ってくるものがある
発信しないと返ってこない。
・　「めざしている学校の姿」「どんな学校にしたいのか？」を保護者も共感したいけど、「めざしているのはこの姿という写真」で提示するなどして伝えていく・・・
・　痛烈なメールがくることもある（平林先生）
・　新城では「伝える文化」を定着させたい（先生方にはまず出してくださいとお願いしている）→第２弾は「思いが加わる」ような学校ホームページにしてほしい・・・とお願いしている

○　更新することは・・・
・　一宮市もすごい更新率　市教委もいるのでいいにくいが・・・
「更新しよう」から始まった　教育長が「もっとやれ！」「最低レベルはそろえよう」と　どこの学校もほとんど毎日更新　最近は思いが加わってきた

○　ホームページ担当を引き継いで
・　異動したばかりの学校で管理職より担当に指名された　「ホームページを変えたい」と訴えた！　デザインはどうしよう？・・・不安に・・・
「引き継いでほしい」とまず言われた
「やりたいようにやらせてほしい」と訴えた
「子どもたちのためにいいと思ったらやれ！責任はおれがもつ」
しかし、システム導入ができなかった　←　営業担当が市教委とトラブル
「市教委の許可がないと・・・」（営業担当より）
※「こういう学校にしたい」コツ　→　教育委員会に言わなかったらいい（玉置先生）
・　ホームページのトップを変えたら、ＰＴＡ会長がいきなり学校に乗り込んで来た
「なんだこのホームページは？」「もっとおとなしいホームページにしろ！」
「ちょっとしばらくみていてください」・・・今は大丈夫　その後もっと要求が・・・
・　「派手だ！」←「シンプルにする」心がけたこと　こころがけていること
※　引き継ぎで大切なこと
①「３ステップ」　②担当の先生ががんばればがんばるほど、引き継ぎに困る

「荷物」とならないために
①「シンプルに」②「教育活動の裏にあるものを大切にする（大西さん)」

☆　会場へのアンケート　土日も含めて　アンケートシステムの解説
・　週に２～３度の更新の学校が最も多い

○　学校評価はどんな機会に？どう対応する？
・　水谷先生より　学校評価　行事の度に学校評価を実施している
・　よくない評価が多いのかと心配したが、いい評価ばかり。応援してくださっていることがわかる。また、自分の子どもの学校を応援したいことがよくわかる
・　感想を求めると、とてもたくさんのメールが・・・。絵文字入りで。
・　紙媒体の集計　→　ＷＥＢの集計方法に過渡的に使用　アンケート用紙も併用
・　学校評価アシストを入れて、格段に集計が速くなった　すぐに回答　アンケートをしてくれる人たちが一層増えた

○　小刻み評価の有効性
・　評価は何のためにするのか？評価を受けて、どれだけすばやくレスポンスし、改善してよりよくするために変えていくのか？←そのためには小刻み評価がいい
・　「あんなに言ったのに、全くレスポンスないね」と思われたら　保護者や地域のみなさんは協力してくれない　評価をしてすぐに反応して、改善していくことが大切
・　愛される学校づくり研究会では、学校評価アシストのシステムを価値のあるものにしていくために２年間の研究してきた
・　集計結果を分析して、素直に受けとめ、できるだけ速く改善して、ホームページなどで返して、自分たちの思いも込めて伝えていく
・　「指導と評価の一体化」というが、何度も機会を設定し、その都度評価していく方が、改善をしてくこともでき、それを積み重ねていくことにより、最終的には総括的な評価にもつながる。だから年度末に改めて学校評価をする必要がなくなる
・　「学校評価はガイドラインには入っていない」
・　半年に一回、学校評価をするのではスパンや評価するもの自体が大きくなってしまうそれでは「何を評価したらいいのか？」がわからない
・　野木森先生がお話になったように、最後の評価の総括がいらなくなるかもしれないシステムなどの仕掛けをしないと、集計がたいへんになってしまう
・　小西先生が始めたシステム　→　現在のシステムのベース
・　参観日にコンピュータルームを開放　紙媒体も併用

○「発信なくして受信なし」
・　学校が何をしているのか？の情報を提供していないのに評価はできないだろう
・　評価のよりどころとなる情報をホームページにリンクさせ、紙媒体でも配布して、保護者や地域のみなさんに評価していただく
・　キーワード検索ができるように、記事を作成するときにキーワードをリンクして入力それにより、学校づくりのキーワードを意識して記事を書いていくことができる
「学校広報と学校評価の連動」

○　柳瀬社長　儲かりますか？
・　まだ儲かっていない　儲けたいと思っている　儲けないといけないとも思っている
・　世間では、学校関係者と企業が近くなると、色眼鏡で見られてしまう
・　他の分野では産官学社が連携しているのに・・・
・　誹謗中傷が現実にはあり、現状では慎重にならざるを得ない

○　授業評価（授業診断）への挑戦　←　五反野小学校　三原校長先生
・　日本で初めてのコミュニティスクール　５００名

・　コミュニティスクールでの学校評価　地域の人が評価するのは当たり前
・　地域のみなさんにとって、学校がわからないのに評価していただくわけにはいかない
・　一週間ぶっ続けの公開　土曜も公開　前期・後期と実施
・　授業診断　保護者・地域・市教委のみなさんにも評価用紙への記入をお願いする
　シートをもって学校の授業のすべてを評価していただく
・　データの集計　開かれた学校づくり研究会に所属する地域のみなさんが集計
　先生の恣意が入らないように
・　「校長や教頭がしなければいけないことを地域に任せているのではないか?」という意見はないか？（玉置先生より突っ込み）
　自分は教育分野が専門ではない
　保護者に「評価をしてください」というと冷静な目で見ようとしてくださる
　「何ために評価をしているか?」を保護者や地域のみなさんにお願い
　「いい学校にしたいから」「クラスの子どもたちが学びやすい学校環境にしたいから」
・　先生は猛反発ではないか？
　先生たちが猛反発　「授業の専門家ではない人たちから評価されたくない」やっぱり！
　民間では「どう見られているか？」を意識していない企業はつぶれている
　「いい学校にしたい」「いい授業にしたい」という親の気持ちに立ってほしいと訴えた
　保護者は「勉強ができるような学校にしてほしい」とだれもがいう
・　「学校が変わらないといけない」という仕掛けの一つだと思う
・　方向として文科省が地域や保護者に視点を向きかけている　←　追い風
・　三原先生の学校では、保護者が集まって、学校を応援するシステムをつくっている
・　「私学でもやっている？」→個人のメールアドレスを保護者にも公開している（驚き）

☆　会場へのアンケート　授業評価　授業診断を保護者等に受けたいですか?
　「受けてみてもいい」　が最も多い

○　毎日更新のコツ
・　小刻み評価　情報提供して評価をしていただくことが大切　資料７ページを参照
・　時期ごとに行事がある　それをもとにして書けばいい　ネタには困らない
　写真に季節感がある　←　趣味　「いい学校に思えますよね～」(笑)
　見てみようかな?という人が増えて、見ていただける　→　それが広がっていく
・　春になると桜の定点観測　校長がカメラを持っていくのがいい
　子どもたちにもとってもいい　→　いいところを見てもらおうとする子ども
　カメラを持つと自分がいいところを見つけようとする　→　それが伝わる
　「カメラはいいとこみつけのとても大切なツール」

○　「切り札のホームページ」
・　２万分の１の試み　そう簡単にはそこにはたどりつけない　技巧は関係ない
　ホームページを通して学校の現実を見たい　学校で大切にしている文化をみたい
　いろいろな人が書き手になっているそんな学校文化をみたい
　毎日動いているホームページ　地味でベタなホームページ
　評価の項目や基準が示されている　１０００人の人々の協力で成り立っている
　「みんなで学校をよくしよう」とするのには３年はかかる
・　学校は学校だけではない　→　「学校はみんなのもの」
　大事なのは「自分たちはこうありたい」「こんな学校にしたい」という明確な視点。「みんなに愛される学校とは？」「具体的にどんなことができるのか？」「どう伝えたら伝わるのか？」さらに大切なのが、「聴く（聞く）耳を持つ」こと。発信と受信をくりかえしていくとそれが明確になる
　「本当は地域ではない」　学校にかかわるすべてのみなさん（特に先生たち）が「こんな学校にしたい」「こんな子どもにしたい」ということを聴き合い、語り合うことが大切

２　授業名人が語る！斬る！ＩＣＴ活用　【算数】の部　授業名人　志水　廣先生
コーディネーター：鈴木正則
アドバイザー　　：鈴木詞雄
授業者　　：佐藤由美

○　提案授業を志水先生にぶった斬っていただき、私たちが踏ん張るという試み

・　志水メソッド「意味づけ復唱法」子どもの言葉で授業づくりをしたい←ＩＣＴの力で
・　３年　算数　三角形の授業　「三角形の仲間分けをする授業をしたい」
・　これを初めてみる　彼女のクラスはみせてくれなかった　「でもおもしろいなあ」
・　等辺・等角がしっかり保障されている
・　大きくしようとすると、比率がどうしても変わってしまう　←　工夫したところ
・　拡大させたい　紙でやるとなかなかできない　ダブルクリックすると拡大できる
・　魔法のように図形が動いたりしたがどういうソフトか？　フリーソフト「白板ソフト」
・　動かしたのが問題！「教師がやってどうするんだ？」　こどもがやらないと・・・
・　「そこを画面で写さないと」・・・「意味づけ復唱法」の大切な部分
・　正確に定義してほしい　「同じ辺に目をつけて」　→　「同じ辺の長さに目をつけて」
・　授業者がへこんでいるので・・・。ビデオのみせ方　編集の問題
・　パッと右側に動く　あっという間に動いた　また、白黒で跡が残っているのがいい
・　子どもにとっては三角形の仲間分けをするのが難しい　自分が作成した三角形で分けるといい　回転させられるといいなあ　←　紙でもできるのでは？
　しかし、紙でやると動かすと跡が残らない
・　写真が重ねてあるんだ すばらしい工夫 実物投影機だと跡が残らない→ＩＣＴの価値
・　回したら、「回した」という字が出てくればうれしい（価値付け）
　価値付けしたものが文字として概念化できるといい　先生が字を書いてもいい
・　ＩＣＴの授業の多くは機械に操られている感じがする　「でもこれならいい！」
・　子どもたちからどんな言葉が出て、どんなことが起きて・・・
　「三本とも同じ！」とか、子どもの中に概念化される、子どもにとって意味のある言葉、言葉の変化やその深みがレポートの中にない　→　編集の問題　伝える問題（笑）
・　言葉のやりとりだけで進んでいかないように、みんなで知恵を出して工夫してきた
・　子どもたちは「おー」とか驚かなかった　←　それはおもしろくなかったからでは？
　ＩＣＴの機能で驚かせるのではなく、自然なツールとしてＩＣＴを活用　←　思いが
・　三角形を動かす操作は速かった　本当にすばらしい　これはぜひやってみたい！
・　すばらしい実践　三角形の概念を形成するために、この機械やソフトがあるといい
　教科書だけで授業しようと思う先生があまりに多い
・　要望を言うと、子どもたちにひごで作らせたときにできれば感想を聞いてほしかった
　子どもたちは三角形がなかなかつくれない
・　志水先生→「愛のある授業をしたい」

３　授業名人が語る！斬る！ＩＣＴ活用　【社会】の部　授業名人　有田和正先生
コーディネーター：大西貞憲
アドバイザー　　：浅野哲司
授業者　　：西山竜市

○　有田先生の「バスのうんてんしゅ」をＩＣＴで

・　愛教大で志水先生と一緒だった　筑波大でも一緒だった
・　名古屋駅の８本のホームに、１４のきしめん店　おいしいのは３・４番ホーム住よし
・　２分で食べられるか？と挑戦したが、無理だった　やけどした
・　３年生「店で働く人々の仕事」　デパート・商店街の追試が可能→コンビニで
・　「バスのうんてんしゅ」を「コンビニの店員」で追試
・　「どこをみているでしょう？」が切り口
・　「コンビニに行って調べたい」という気持ちをはぐくむ
・　「子どもたちが調べようとして本当に困る」とコンビニから苦情が来れば成功
・　自然な授業ではなく、ヒートアップした授業をみていただく
・　同じようであってちがう　ちがうようで同じ
・　数にこだわったというのは似ている　２～３年生は数から切り込むのが定石！
・　「？」の入った箱　あれで子どもがふわっとなった
・　雰囲気をやわらかくしたのがすごい　すばらしい
・　これからどういう追究するのか？　？をどんどん広げいていく　自分の足で探究するのがねらいの単元　子どもからどんな？が出たのか?
・　お客さんがいないときにコンビニの店員はどうしている？忙しいときは？・・・。
・　コンビニの切り口は「マグネット」部分　客を惹きつけるところは周りにある
真ん中の棚にあるのは同じ
ぶら下がっているものを「カレンダー商品」という
子どもが喜ぶ商品が置いてある　切り込みの定石と子どもの盲点をさぐるのがコツ
そこから切り込むとおもしろい　子どもはマグネット部分の周りを走り回ればいい
アイスクリーム　おでん　最近はコンビニで試食をさせる
１００円均一店百円ローソン　一番お客が多い　子どもが多い
「ポイントとなるところがほしかったなあ」　絞り込んでいくと子どもにはてなが生まれる　こちらの店とあちらの店のマグネットの商品がちがうことを見つけてくる
・　「デジタル画像は使ってみたいと思うか？」ぼくは大嫌い　コミュニケーションテクノロジーが弱い　子どもがコミュニケートできない　だから手書きをしている　自分に技術がないからおもしろいと思わない　「今日の授業はこれだけを押さえたい」と思うと、一枚の絵に収斂される　資料はきっちり絞っていくことが大切！
・　「あれだけ苦労して作って何か言いたい？」
ポイントを絞るのはとても大事だと思った
導入で「調べたいなあ」と思わせるところでＩＣＴを活用できるのではないか？
・　視点の転換は一番難しい　人は固定観念にとらわれてなかなか視点が変えられない
帰るときはちがう顔して帰るぐらいに
札幌のコンビニでマグネット部分に多いのはトマト。ちょっと理解できない。それがない店は客が来ない。山のようにトマトがおいてある。店によって商品がちがう。そういうのを動かしてもいい。自分の足で稼いで、いろいろな店を見ることで視点の転換をしている。「ぼくは若いから」（笑）
・　ＩＣＴに目を向けることも大事だけど、授業のポイントとＩＣＴをどう結びつけるか？コンビニのことをもっと追究しないといけないと思った
・　「若い人はどうしたらいいか？」
①まずは私の本を買うこと
②蟹江さんというのは初めて日本でトマトジュースをつくった家　どうしてそのことが出てこないの？今日の授業はこれだけは追究したいというのを鮮明にしていきたい
③「絶対に教えない」「子どもが学びたい」「追究したい」という授業に！
・　「教えたいもの」を「子どもが学びたいもの」に変えたいに　←　資料に尽きる！

４　授業名人が語る！斬る！ＩＣＴ活用　【国語】の部　授業名人　野口芳宏先生
コーディネーター：堀田龍也
アドバイザー　　：伊藤彰敏
授業者　　：吉田　愛

○　野口先生に切っていただくのがメイン　谷川俊太郎「うとてとこ」

・　何かあったら伊藤先生の責任　いいところは授業者のおかげ
　ＩＣＴにどう助けていただくか？それを野口先生はどう斬るのか？
・　後期高齢者になっても、若い先生に相手にしていただいている　敬老精神に感謝！
・　初めてビデオをみる　打ち合わせもなければ、根回しもない　本当に困ったもの！
・　「う（鵜)」は何かをＩＣＴで提示
・　学習用語（テクニカルターム）をいかに定着させるか？←ＩＣＴの活用　既習教材で
・　たった１０分の計画分で２時間の授業をつかってしまった。「野口先生の発問の意図等を考えられていかなった」と深く反省した。「ＩＣＴを」の前に日ごろの授業を見直すよい機会となった
・　「受けの技法が難しい」と実感した。ＩＣＴどころではなかった
・　「はじめは簡単と思ったが、大事なところがみえていなかったなあ」と省察した
・　ＩＣＴの活用　①鵜の写真をみせたこと　②教材を提示したこと
・　「鵜はどう猛な鳥である」「大きさは？」「羽根を広げるとどれくらいでしょうか？」
・　鵜が庭に来たことがある これがこわかった ← ＩＣＴの限界を超えたことが起きる
・　既習方法を出した　「原文を出したことがいい」　←　ＩＣＴについてはそれぐらい
・　ＩＣＴがうまくつかわれたか？　←　どうしても機能から考えることが多い
・　鵜飼いの写真があるとよかったかな？
・　「学習用語を押さえる」という観点から
　国語の授業　何を教わったのかわからない　数学なら何が教わったか？が語れる
　「国語で何やったの？」といっても　子どもも先生も答えられない
　一連　二連　三連　体言止め　七五調　・・・・　教材内容を教える必要がある
・　「上手に読めたね」ではダメ。昇調のところは文脈を理解して読めることが大事
・　野口先生の授業に出逢えて、学習用語を押さえた授業の大切さを理解できた
・　私が言っていることを素直に受けとめて実践したあなたがすばらしい
・　ナンセンスポエム　何だろうと思わせて進める　最後には納得する　それがおもしろい　一通り読んでいく方がいい気がした　最低でも２連つなげて・・・
・　「う」から出していくことがよかった
・　気になったことは、こどもたちが非常に無表情　先生はとても表情が豊かだったが、感情が表情に出ていなかったことがちょっと残念　「あれ？」とか「そうなんだ」とかがあるとよかった　あんな無表情でやる授業ではない　幼児のような笑顔がほしい
・　子どもに緊張させないようにすることが大事　「普段の通りでいいんだよ～」
・　野口先生からばっさり斬られるつもりで授業をさせていただいた　さらに授業をよくするためにどうしたらいいのか？をこれからも継続して、さらに研究していきたい
・　先生は「よく追試をやっていただいたなが実感。こわくて自分ならできない」
・　「ＩＣＴを使うとすると？」
　自分がこの授業をしたのは５０前　資料が多すぎる　これは重大なこと
　「ここは使ってはいけない」「ここは使わない方がいい」というように引き算で考えた方がいい

５　パネルディスカッション　「授業名人と語るこれからの授業づくりとＩＣＴ活用」
　コーディネーター：堀田龍也
　パネラー：授業名人３人（志水　廣　有田和正　野口芳宏）大西貞憲　玉置　崇

○　ＩＣＴ活用と現状とこれから（玉置先生）
・とりわけ授業名人の先生にわかりやすくして説明していきたい　主語は「文科省」
・キーワードは２０２０年　昨年の提言　堀田先生・・・私もかかわり提言
・全児童生徒に　タブレットＰＣ　デジタル教科書を配布
・「ＩＣＴは使い方によってとても効果がある」というデータが出ている　←　定説？
　①一斉指導において②個別学習において③協同学習（互いに学び合う学習）において
　授業のどの場面でも使えるんだという大きな流れ

・【算数の実践】　思考の整理
　【社会の実践】　思考の増幅・想起
　【国語の実践】　知識を想起・蓄積

・先生が指導者用デジタル教科書を活用する　→　２０２０年　学習者用を活用する
・２０校が先行的に試行している
・現状では、実物投影機の使用による提示、書き込み、拡大等が流行っている
・フラッシュ型教材　数字や文字などの提示などの使い方も広まっている

○　２０２０年の次の学習指導要領ではこうなる
　今期の学習指導要領では実物投影機・指導者用デジタル教科書・・・の活用
　子どもたちの学びのツールとして活用

○　志水先生より
・算数ではどこで使えるのか?わかりやすい説明のために活用する。これは必要。
・問題解決型授業の問題はわかりにくい　あんなことでは学力はつかない
・自分で問題を獲得していかないといけない　教えなくてはいけないこともある
・授業で考えていくと、教師からの説明だけでいいのか？そんなことはない
　子どもたちが自分で気がついて概念を獲得していかないといけない
・「青色二本と青色三本の何がちがう？」と問う。
　２÷３＝２／３　分子と分母だと語る
　子どもが頭をぐるぐるまわしたときに、先生がそれを気づいていかないといかない
　コミュニケーションが大事
・ＩＣＴには教育という言葉がない　教育という言葉を使ってほしい　それがないと教師からの一方的な授業になってしまうような気がする

○　有田先生より
・現在のようすでは応用力が足らない　「想定外」という言葉がよく使われている
・学習指導要領の３つの学力
　①基礎的基本的な知識と技能の習得②活用・思考判断・表現力③主体的な態度
・文部科学省の方向性は　とても大切な「想像力」と「創造力」と対極にある
・一言で言うと「応用力」　←　ＩＣＴでうまくいくか？　いかないと思う
・「奇跡が起きるのは教育しかない」「奇跡を起こす教育」
　奇跡を起こさないと教育ではない　それをするのが大切！
・ＩＣＴ活用のヒント
　３年生がやっている昔のくらし　なかなか見学するところはない　５０年ぐらい前のようす　撮ってきて　子どもの？を巻き起こす　天井・いろりの上　米俵をくくってつり下げている　松の木が燃えたけむりから種籾がつるつるになる　ねずみが食べられない　ねずみが屋根から落ちる　これが創造力　みえないところがおもしろい　みえないものをみえるように、子どもが言葉として語るように追究していきたい

・　たくさんみせてはダメ　子どもと資料がコミュニケートできるように　そういう資料を出してほしい　そうやってＩＣＴを活用してほしい
・　デジタル教科書について検討
　「授業を転換する材料ではない」→「授業を充実させる材料として活用する」
・　算数の三角形の授業　直角三角形を建設会社に注文する　寸分違わぬタイルを注文したい　しかしそれができない　そこのところをきちっとやらせていきたい
・　反復練習をきっちりやらせないといけない

○　野口先生より
・　この会にとても大きな意義がある　玉置先生は教育事務所長
　上司にきいていない　非常に重要なことである
・　「もし上司に訊いたら」
　そうするとこの会はありません　やたらと訊かない方がいい
・　自分が講演で本を持っていくというと「上司にきく」という　「訊くな」という
・　日本を元気にするためには相談しないこと
　→悪いことをするのに相談しないでしょう？
・　研究会の発表ではパワーポイント。パワーポイントでは消えてしまう
・　想像力の話　「夜　遠目　傘のうち」女性が美しくみえる
　想像は隠すところに意味がある　見せすぎると想像力を細らせる
　「出し惜しみを考えた方がいい」

○　大西さんより
・　デジタル教科書でも抜いてあるところがある　先生の想像力や仕掛けが足らない
・　想像力・創造力は提示方法による
・　「何を見せるのか?」「何を言わせたいのか？」「気がつかせるのか？」使う側の問題
・　ＩＣＴを使う意味　どんな条件だったら描けるかな？ちょっと機械に助けてもらおうか？→そういう使い方もある　可能性は無限　要は使い方!　提示の仕方！
・　「コミュニケーションはそれだけ？」
　→ＩＣＴだからこそ生まれるコミュニケーションがある
・　想像力がなくなる例　原子を見せます　見せられない　所詮それは「モデル」
　→「どんなふうだと思う？」と訊いたら？
・　「見せるのが結論では意味がない」
　→それをもとに考えていく授業にしていくを考えたら？
・　「授業に求める子どもの姿」
　→「こういうことができたら子どもにどんなことができそうか？」今までできなかったことができるようになるかも・・・「子どもにどうなってほしいのか?」
・　黒板だけではダメ。だれもいいとも思っていない
　→ＩＣＴも一緒!　使える道具が増えた　新たな形のコミュニケーションが増える

○　堀田先生　３つに共通して　「見せ過ぎちゃった」
【算数：佐藤実践】
　あのソフトがすばらしいわけではない
　三角形を動かしても残っている　その着眼点がすばらしい
【社会：西山実践】
　どこをみているのかをみながら話し合う
　視点が移り変わる速度　速すぎた　どこをみたらいいのか？を絞って・・・
【国語：吉田実践】
　既習事項や題材を提示して確認
　見せ場→どう振り返るのか？
・　どうしても機能から考えてしまう　機能をむき出しにして　機能を使いすぎてしまう

☆志水先生　「立ち止まれ！」
☆有田先生　「見せすぎだ！」「考えさせろ！」
☆野口先生　「出し惜しみをしろ！」

○　「文科省が主語ではなく玉置先生目線で語ってください」　←　堀田先生より
・　行政に５年。これだけの高価な機械を入れてなかなか効果が上がっていない
・　気軽な使い方ができるようにと思い、ＩＣＴを使うことが先行している感がある
・　今一度「教材研究のたのしさにもどれ！」「立ち止まれ！」と名人に語っていただいた
・　こうすれば・・・　この先はどうなっているのだろう？　はてなが生まれるように・・
・　発見型ツールが思い浮かんだ　困らせて→データを集めると→あーそうなんだ！
・　万能や便利が先行　どこでつかっていくか？授業として崩壊していく心配がある

○　終わりに一言を！
【志水先生】
・　教えたい知の部分とやわらかいこころの部分に変革をもたらすような授業をしたい
・　先生を無視してどんどんつくっていくことができるような　子どもが熱中するような数学的な性質や価値が追究できるような　そんなＩＣＴの活用を期待したい

【有田先生】
・　「応用力」の部分ではＩＣＴは必要　使い方をどうするか?が課題
　写真を取り込む　雑誌の写真・・・新しい教材をつくりだす可能性を感じる
　一粒の米から日本の農業がみえる授業をしたい　１４．５％の水分　１７万の細胞
　その細胞の中に２００のデンプンが入っている　６５％の水分にするのが炊飯するということ　ハネがあるから９８度まであがる　おいしいご飯ができる　そういうことをＩＣＴで実現していってほしい。

【野口先生】
・　結局最後は、生の６人がしゃべるような形態　江戸時代からやっぱり変わらない
・　自分もテレビを見せればわかると思った　しかし、テストでは全くだめだった
　「同じような間違いを繰り返さないでほしい！」
・　今日の３つの授業では、子どもの言語活動が貧しい　★日本中の言語活動が貧しい
・　「私的言語活動」から「公的な言語活動」へ。その意識がまだまだ足らない
・　○の多用。点を減らす

【大西さん】
・　ＩＣＴをつかうことで、時間と距離を縮める
　①「去年の３年生はどうだった？」デジタルに残す価値
　②「自分たちがやったことを来年の３年生に」とメッセージを残す
　③「個人の時間や足跡をデータに」→自分の成長を振り返り、自分との自己内対話でコミュニケーションを図る試みはどうか？「こんなことができたらうれしいなあ～」

【玉置先生】
・　「いいものはやれ！」と勇気をいただいた
・　自分が始めると何か迷惑がかかるかもしれませんが・・・(笑)（拍手）（涙）・・・

６　終わってからの余韻　互いの学びの共有と省察　受けと語りがさらに感動的・・・
　来年は？（野木森先生より）→本質にもどり、地味でベタな日々の営みと再挑戦を・・・
　新しいことを考えなくても、この精鋭と授業名人の存在だけで奇跡が起きる　有田先生のようにフットワークとネットワークで学ぶ喜びをたのしみ味わい、子どもの表情や学びの事実に基づき、引き算の発想で、想像力と創造力（応用力）を生かす愛のある変革を！「発信なくして受信なし､改善なし！訊くな やれ！」素直にはい！